

第一位

忘れられない本

情報工学科三年 向 美紀

『そこに僕はいた』この言葉を聞いて皆は何を想像するだろう。私はなぜか、このタイトルを強く気に入っている。七文字。たった七文字の言葉だけど、私はこれからもずっと忘れないだろうと思う。

この本と出会ったのは中学生のとき。学校で習ったのをいまだに覚えている。主人公の男の子である僕と、いつの間にか遊び仲間となっていた、あーちゃんという片足が義足の障害をもった男の子。いつも一緒に遊んでいた二人。でも大人達からは、あーちゃんと一緒に遊ぶときは気をつけなさいなどと言われ、主人公の僕は複雑な思いになり苦しんでいく。しかし、自分が目を失明しかけたことにより複雑な思いがとけ何かかわってくる。そういう内容であるノンフィクションのストーリーだったのを覚えている。もちろん、この内容に相違はない。

一見、中学校の教科書に出てくるわけだなあと思いそうになる、ありがちな本に見える。でも、なぜ私がこの本に執着し、この本の内容までも覚えていたか？ それは今、久々に読み返してみてもうやくわかった気がする。

その本を読むまで、幼いときから学校では、「差別はいけない」だとか「障害者も皆同じだ」とか、物凄く抽象的で且つ「〇〇はこういうものだ」という理論的に組み立てられた考えを社会秩序として、耳にたこができるくらい何度も聞かされ、教わってきた。もちろん、道徳的な学習がいけないといっているわけではなくて、私も必要だと思う。けれども、本当に今まで教わってきたことは全てが全て、当てはまるのだろうか？ と、思うような内容がこの本にはつまっていた。

本の中で、あるときこんな場面があった。主人公の僕やあーちゃんを含め何人かで皆で山の急斜面に基地を作ろうとしたとき、義足である、あーちゃんだけが登れずにいた。

「すまんかった」と主人公である僕が誤り手を差し出すと、

「何で謝るとや。それになんなこの手は。」

と、あーちゃんが言って帰ってしまった――。

あーちゃんは何で帰ってしまったのだろうか？ 初めて読んだとき私は変な違和感を覚えた。私にはなぜあーちゃんがそう言って帰ったのか不思議でたまらなかった。そのときの私には、あーちゃんが、自分が障害をもっていることを気にしないで楽しみたいのに僕

は、あーちゃんにとって一番されたくない態度をとってしまっていた、変な気を使って欲しくない、普通にしたいだけなのに...だからあーちゃんは辛かったんだという気持ちをなかなか受け入れる事ができなかった。今まで気づかいたと思っていた事、それがこんなにも傷付けることだったとは...。私は本当にもやもやした気持ちでいっぱいだった。

もう一つこの本の中で一番大きくショックをうけた場面があった。主人公の僕があーちゃんと遊ぶことを苦痛と思わなくなり、ハンディを背負っている人だという意識がなくなり本当に自然に手を差し出せるようになった頃、僕があーちゃんに、

「あーちゃんは、どうしてそうなったと？」

と義足を指差して聞いた場面。するとあーちゃんは笑顔で、

「電車にはねられたとたい」と言った——。そう書かれてあった。

私は又変な違和感を覚えた。驚きを隠せなかった。「何でそんな事聞くんだ？！ とても失礼ではないか」と私は思っていた。前は、そんなノンフィクションの話を受け入れることができなかった。今思えば、僕が言った言葉はごく自然な言葉なんだなぁと思える。いつの間にか身に着いていた変なマニュアルに囚われずにでた、「何で？」って思う当たり前の質問。逆にわざと聞かない方がどこかで見下しているんじゃないかなって思う。確かに唐突に聞くのもびっくりされるかもしれないけど本人同志が本当に素直な気もちであれば分りあえるんだなぁと思った。私の中でこの事がこの本を印象付ける事になった一番の理由だと思う。

私は今まで幼いときから道德の授業や人権学習なので習ってきた事が全て間違っているとは思わない。けれど、そんなマニュアル通りに習えば習うほど、もし自分があーちゃんのような人に出会ったら変にギクシャクしてしまうような気がする。

私はこの本と出会えてよかったと思う。私の中で鎖で繋がれていた何かが開かれ一気にパッと明るくなったような気持ちになった。

確かに差別をする事はいけない事だと思うし、皆同じだという概念は変わらない。しかし、変に気を使い過ぎではないだろうか？この子は特別なんだというレッテルをさらに確認付けているだけのように思えてくる。色んな人がいるという事を知る必要はあると思うが、変なマニュアルに囚われていた今までの自分は何だったんだろう？ とこの本を読み返して本当にむなしさが込み上げてくる。

ごく当たり前の事、自然な事、普通の事が忘れられてしまった世の中、できなくなってしまった世の中。そんな世の中だからこそ、自分は何を感じ、何を学び、何をする事がで

きるのだろうか？ 実際は学校で教わってきたマニュアル通りなんか上手くいかない。この本と出会ったように又これからもっと大きなショックを受けるような事があるかもしれない。やはり幼い時から知らぬ間に身についてきた事は別の事をうけ入れようとするのはなかなか難しいから、その代償は大きいと思う。

「あの人と関わったら何かあったら困るからやめとこう」とか「。。。はこういうものだ」というふうに決め付けたくないし、変なマニュアルにも囚われたくない。それが今の本音なのは事実だし、この気持ちはこれからも変わらないと思う。でも、そんな世の中では、ないことも事実だし、実際に自分は本当にこの信念を貫きとうせるか？と聞かれると正直分からない。キレイごとばかり並べてるんじゃない！！ と、逆に社会から怒られるかもしれない。でも、キレイごとって呼ぶ人もいるけど、それって大切じゃないのかなって思う。誰だって、あーちゃんのように普通に接して欲しい、皆と違うところはちゃんと受けとめて欲しいと願っている。本当にだれでもそう思っているはず。

これから私が超えていく壁は物凄く大きいだろう。挫折も何度もするだろう。でも始まったばかり。これからたくさんの人と出会い、考えさせられ、マニュアル通りに行かなくて悩み、何度となく人生の岐路に立たされるだろう。そんなとき、この本と出会ったときのように、たくさんの時間がかかってもいいから、全てを受け入れ、そしてそこから自分の答えを探していきたいと思う。

『そこに僕はいた』この言葉を聞いて皆は何を想像するだろう。私はなぜか、このタイトルを強く気に入っている。七文字。たった七文字の言葉だけど、私はこれからもずっと忘れないだろうと思う。

書名 そこに僕はいた 著者名 辻 仁成 出版社名 角川書店